

幻への疾走

黒岩重吾

幻への疾走

昭和五十年十二月一日 初版発行

著者 黒 岩 重 吾

発行者 増 田 義 彦

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三一―
振替 東京一―三二六 〇一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(三六三)一七〇六
印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

幻への疾走

黒岩重吾

幻への疾走

結婚記念日

一

土曜日の夕、久保木は妻の幸子と、去年小学校に入ったばかりの浩を連れて心齋橋筋に出たが、気持はおでやかでなかった。

家を出る寸前まで、久保木は幸子と食事の件でいい争ったのである。

丁度その日は結婚記念日なので、久保木は久しぶりに妻子と食事する積りでいて、ホテルの Grill をリザーブした。

ところが、家に戻ってみると、幸子は、ホテルの Grill などて食事するのは勿体ない、といい出したのだ。浩が、半人前としても、食事代に一万円はかかる。食事代に一万円払うぐらいなら、浩の服を買いたい、そんな無駄遣いはよそう、というのだった。その件では、前から幸子との間で議論し、一年に一度か二度ぐらい、生活の気苦労を忘れて、ゴージャスな雰囲気を楽しむやないか、という久保木の意見に、幸子も、それはそうね、

と納得していたのだった。

久保木は時たま、客の接待でホテルの Grill で食事することがある。久保木はまだ課長代理になっていないから、交際費は認められていない。

だから、そういう場合も、課長のお供であった。豪華なホテルの最上階の Grill で、夜の街の灯を眺めながら食事する気持は何ともいえない。

久保木が結婚記念日に、幸子にも、そういう雰囲気も味わせてやろう、と思ったのも自然だろう。

ところが、家に帰ってみると、幸子の意見が、変っていた。心齋橋筋のレストランに行けば、親子三人で、二千円で充分良い食事が出る。

だからホテルで一万円の食事した、と思い、余った八千円で浩に服を買いたい、と主張し始めた。幸子は、こういうことになる、と、強引に、自分の意見を通そうとする。

それよりも、幸子の意見が、久保木一家の生活の上に立ったものだけに、久保木はやり切れなくなった。久保木としては、結婚記念日の夜ぐらい、フィーリングの世界にひたりたかった。

それが、何万世帯が住む団地の、息苦しい現実の世界

に引きずり下ろされたのだった。

大体こういう場合、女性は一アーティストだから、家計簿を突きつける。

物価高による生活の苦しさ、浩が大きくなって行く将来についてまで喋られると、

……もう良いよ、分ったよ……

と細君に従わざるを得ない。

本当のところ久保木は、今夜の外食はやめた、といったかったのだ。ただ何といっても、結婚記念日でもあるし、喧嘩して、幸子に泣かれたりふくれられるのも鬱陶しく、渋々家族三人で心齋橋筋に出て来たのだった。土曜日の夕方だから、難波界限、心齋橋筋は大変な混雑だった。

浩を真中にして、歩いたが、久保木は幸子の意見に屈した自分が腹立たしくなって来た。幸子は、婦人服店、婦人靴店などの前を通り掛ると、

「一寸、待って」

とショオウインドオを覗き込んだり、店内に入って行ったりする。ボーナス期はまだだし、ホテルの食事を節約した八千円で、自分のものを買う積りはない筈だった。

浩の服を買うのは確かである。

ところが、ショオウインドオを覗き込む眼付きは真剣そのものだった。

その間、久保木は迷子にならないように、浩の手を握って、群衆の中で、押されながら待たねばならない。

「おい、もう良い加減にしろよ」

と久保木はレストランに行くまで、何度もいわねばならなかった。

もう数日で四月だった。四月になれば、人事異動の発表があり、入社して十年、三十四歳の久保木は課長代理になれる筈だった。

久保木が勤めている赤川商事では、大学卒で、大体、入社して八年から十三年の間に課長代理になる。

大体、というのは、勿論、仕事に熱を入れ、成績をあげている連中のことで、上役から、こいつは駄目だ、と見放されている者は、十五年たっても課長代理にもなれず、それこそ、万年平社員に近い状態で、停年まで放っておかれる者もいる。

久保木は熱心に働いて来たし、今の課長の大抜から、そんなに嫌われていない、と思っている。ただ、特別可愛いがられている、という方でもない。

特別可愛いがられていた佐村は、二年前に課長代理になって、榮転して行った。

昨年は、仕事の上で久保木も一目置く、一年先輩が課長代理になった。久保木の課で、同期入社はいない。接近しているのは、一年後輩の鉢本である。鉢本は、とくに切れる男でもなかったし、久保木は、仕事の面では、鉢本をリードしている自負があった。

だから、もし久保木の課で課長代理になる者がいるとすると、彼以外にはなかった。

久保木の後輩達も、そう思っているようである。

浩はライスカレーを食べたがり、久保木は幸子に、

「それごらんさい、ホテルのグリルに、ライスカレーなんか、ありますか？」

といわれた。

そういわれると、久保木も首を捻った。課長のお供で、ホテルに行った時、メニウを見たが、ライスカレーまで覚えていない。

軽食用のコーヒーストップには、間違ひなくあるに違いないが、メイングリルとなると返答出来ない。

レストランの事前に赤電話があったので、久保木は、ホテルのグリルに電話して、席のリザーブを取り消し

た。何といっても、会社の名前を使ってリザーブしているので、取り消しておかねば、会社の信用にかかわる。会社に対して、久保木はそれほど氣を使っているのだった。

そのレストランは、それでもそんなに大衆的な店ではない。久保木が注文したステーキは八百円で、サラダやコーヒーを加えると千二百円になった。

幸子もそこまでは文句をいわず、結婚記念の夕食を楽しそうに食べている。

周囲を見廻すと、自分と同じサラリーマンらしい家族連れが多かった。

「ね、ママ、このカレー、からいよ」

と浩が幸子にいった。

レストランだから、家で作っているような庶民的な味ではない。

ライスと、カレーが別々になっていて、自分が好む量を、ライスにかけて食べる。

「それじゃ、少なくかけなさい、うちで食べているカレーと違って、上等なカレーなの、残したら勿体ないわよ」

幸子は、浩が持っているスプーンを取ると、カレーを

薄くのばして、飯と交ぜている。

それで、幸子は結構楽しそうだが、そんな姿を見てみると、久保木は何だか侘しい気がする。

赤川商事といえば資本金百億、中クラスの商社だった。繊維を主体に出発したが、商社批判の風当りを真向から受けているのも当然で、商売として扱っていない品は殆どない。子会社では、回収まで始めた。

回収業といえば恰好が良いが、俗にいう屑屋である。

それだけに、コスト高の影響も余り受けず、業績は良く、この三月決算など、利益をどう押えるか苦労しているようだ。

そういう一流商社のエリート社員だから、普通ならめぐまれている筈だが、現在のインフレに給料が追いつかない。

現場の作業員が少なく、男子社員の殆どが大学出のエリートだから、インフレ手当を超越せ、と強引なストも出来ない。

会社が儲けている割に、商社ほど労組が弱い業種も少ないのではないか。

「ね、浩ね、字がクラスの中で一番なんですって、先生にね、字を習っているんですか、といわれたわ」

「良かったね、君も字が上手だったからね」

「あら、私なんか、でも、楽しみだわ、今度は女の子が欲しいわね、そうすると、生活の面でも色々考えなくっちゃ」

「うんそうだな」

久保木は、子供なら浩一人で充分だ、と思った。数年前なら兎も角、このインフレが、どうおさまるか、見極めてからでないと、子供などつくれない。

何となく溜息が出そうになったが、この四月には課長代理だ、と思うと急に元気が出て来た。サラリーマンにとっては、何といっても、管理職につくのが、最初の夢だった。

二

二千円の食事が二千五百円になった。幸子は、久しぶりで豪華な食事をした、と満足している。心斎橋筋を難波の方に向かって歩いていると、子供服の専門店があった。

「今度で良いじゃないか、別に今日買わなくても」

久保木は腕時計を見ながらいった。

今は丁度八時である。今夜は九時から、二時間、土曜

映画劇場がテレビである。

アラン・ドロンのギャングもので、久保木は観るのを楽しみにしていた。

「買わないけど、一寸見るだけ」

そういながら、幸子は浩の手を引いて、もう店の中に入りかけていた。

「それじゃ、僕は先に帰るよ」

「テレビでしょう、ええどうぞ」

幸子には、久保木が先に家に帰ろうと、そんなことは、余り問題ではないようだった。久保木は、

「じゃな」

といい歩き出した。

浩が、ババ何処に行くの、といったが、久保木は聞かえない振りをして人混みの中を歩いた。戎橋の信号で待っていると、甘い香料の香りが久保木の鼻をくすぐった。

香料につられて横を向いた久保木は、傍に今出澄子の顔を見て吃驚した。

今出澄子は、久保木が学生時代に肉体関係を持ったただ一人の女だった。

化粧が濃く、昔よりも眼が大きく見開かれたようになって

っているのは、整形のせいだろう。もし今出澄子の眉と眼の間にあった大きな黒子が消えていたら、久保木は、多分分らなかっただろう。

「今出さんじゃないですか？」

と久保木はいった。

澄子は久保木を見て、まあ、と驚きの表情を見せたが、それは懐しさに変わった。

「久し振りねえ、驚いたわこんなどころで会うなんて」

「確か、御主人東京だったでしょう、こちらに転任になったんですか？」

「あら、相変らずねえ、もう少し勘を働かせて頂戴よ、私の化粧や着物を見て」

そういわれてみると、着物は素人眼にも、高価なものだが、素人が着るにしては、少し派手であった。

久保木が返事につまんだ時、信号が青になり二人は肩を並べながら難波の方に歩いた。澄子は、結婚が失敗だったのを告げた。

幸い子供もなかったし、実家に戻り、暫くぶらぶらしていたが、それも余り恰好が良くない。

実家は谷町で小さな機械問屋を経営していたが、兄が結婚して細君と子供がいる。

それで、三年前にホステスになり、昨年、大阪のキタ新地に小さな店を持った、と話した。

「久保木さん、もしお時間あったら、お茶でも飲みませんか？」

「そうですね、構いませんよ」

「あら、相変らず固苦しいのね」

澄子は艶のある眼で久保木を見て笑い、難波の近くの喫茶店に入った。

ふと家の鍵を思い出し、久保木は苦笑した。鍵は幸子がつけている。だから、久保木が先に戻っても、家の中に入れない。

少々遅くなっても、理由がつけられる。

……途中で鍵がないのを思い出して、パチンコに夢中になつて遅くなった……

そういえば、幸子も怒るに怒れないだろう。一階はキーキなどを売っており、喫茶店は二階にあった。

満席に近かったが、二人が入った時、窓際のアベックが席を立ち、そこに坐ることが出来た。

澄子は腰を下ろすと、ケントを出し、カルチュエのライターで火をつけた。指にはダイヤを巻いたエメラルドの指輪が輝いている。

かなり大きなエメラルドだった。

久保木は、澄子がかなり金を持っているのを感じた。

昔から陽気な方だったから、水商売には適しているのだろう。

「あれから、何年になるかしら？」

「そうだね、僕が二十二歳……」

「私は十九だったわ、歌の文句じゃないけど、純情だったわね」

そういつて澄子は煙を吐いた。

当時久保木は大阪の市大の三年だった。市大は学生運動の拠点だったが、久保木は、商社に入っただけに、運動に対しては傍観者だった。

澄子はS学院の短大の二年生で、二人は八方尾根のスキー場で知り合ったのである。

澄子が転倒したところに久保木が突っ込んだのだ。久保木は高校時代からスキーをやっていたので、避けることは出来たが、自分も転倒してしまった。そして、二人は殆んど同じ場所、転がりながら停ったのだ。

二人共、幸い骨折もなかった。

久保木は澄子に、あなたの腕では、このスキー場はまだ無理だ、もう少し初心者向きが良い、と忠告した。

澄子はそれに対して喰ってかかり、二人はそのまま別れたが、夜、Tホテルのロビーで再会した。

久保木は友人の押川と一緒にだったし、澄子も友達と一緒にだった。

そこで仲が良くなり、大阪に戻ってから、久保木は澄子と交際するようになった。

二人の交際では、澄子が久保木をリードしたようである。

そして、夏、南紀に泳ぎに行った夜、二人は肉体関係を持った。

果して本当の恋愛であったかどうか、今、思い出してみても久保木には良く分らないが、二人は結婚の約束をした。

ところが、翌年の春になって、突然、澄子は別な男と結婚するといひ出したのだ。

何が何だか分らないうちに澄子は結婚してしまった。

相手は、東京の青年実業家ということだった。

それ以来、澄子と会うのは今度が初めてだった。

澄子はコーヒーを、久保木は紅茶を注文した。久保木は、自分の健康に注意し、一日に三杯以上、コーヒーを飲まないようにしている。

「今、会社にお勤めなの」

「ええ、赤川商事ですよ」

「一流商社ね」

「儲かるのは会社だけです」

久保木は名刺を渡そうか、と考えたがよし。課長代理という肩書があったなら、澄子に渡していただろう。

「だって、商社の人って、景気が良いわよ」

「それは一部だけです」

「そんな固苦しい喋り方は止して頂戴、まだ私を恨んでいるの？」

そういつて澄子は、覗き込むような眼で久保木を見るのだった。

「そんなことないよ、ただ、何故突然、あなたが他の男と結婚したのか、分らない、狐につままれたような思いでしたよ」

と久保木はいった。

女の指

一

澄子と話していても、幸子と浩はもう帰っただろう
か、と氣になる。幸子は、久保木が家の鍵を持っていな
いのに氣付いて、慌てて帰ったかもしれない。

と思う一方、そんなことに氣付くような女性でない、
と苦笑もするのだった。

澄子は、久保木の前から突然消えたことについて、次
のように話した。

話す前に、澄子は何度も、氣を悪くしないでね、と前
置きした。

澄子の家は町工場とはいえ中小企業で、かなり収入が
あった。だから、澄子は高校時代からも派手で、スキー
などに行っても、民宿に泊らず、ホテルに泊ったりした
のである。

久保木も、澄子と知り合った時、同じホテルに泊って
いたが、ホテル代は友人が払ってくれた。彼の父親は神
戸でレストランなどを経営していて、かなりの資産家だ

ったのである。だから彼には、ホテル代を持つぐらい、
何でもなかったのだ。

ところが、久保木の父は小役人だった。大阪市の衛星
都市の課長になって停年退職になったような男である。

だから、久保木は、スキーに行くにも、アルバイトを
して、稼がねばならなかった。

久保木が、大学で学生運動の傍観者として、勉学に励
み、良い成績で卒業したかったのも、一流の会社に入り
たかったからである。澄子は、久保木と付き合っている
うち、次第に、そういう久保木の考え方に反撥するよう
になった。

「あの当時は、私も若かったのよ、世の中を知らない無
知な女だったの、今、反撥なんて恰好の良いこといい
けど、本当は、あなたが、大学を卒業し、結婚してか
ら、果して、あなたの給料でやって行けるかどうか、不
安になったのも、事実よ、その方が、本心だったかもし
れないわ、だから、あなたから離れたの、そんな顔をし
ないでよ、私は、あなたが思っていたような、地味な、
聡明な、家庭的な女性ではなかったのよ」

澄子の指のエメラルドが煌いた。
久保木は、自分の顔が引き摺るのを感じた。学生時

代、ただ一人肉体関係を持った女だっただけに、当時、彼は澄子を愛していたし、捨てられた後は、かなりショックだった。

だから、幸子とも見合結婚である。女性が分らなくなり、恋愛するのが怖くなったのだった。

「怒ったの？」

と澄子が入眼遣いに久保木を見た。

あなたは、あの当時とまだ変っていないのね、と澄子の眼はいつているようだった。

「いや別に、その通りだ、僕と結婚しなくて良かった、家計簿ばかり気にして生きて行かなければならないような生活は、君に似合っていない」

「それ、皮肉のようね」

「いやそうじゃない、本気でいつている」

「でも、商社の方って派手でしよう、私の店にも時々、来られるお客さん、おありだけど……」

「それは、ポジションによる、それに部課長クラスになるとね、かなり交際費も遣えるしね、だけど、僕など、まだ駄目だな、それに、バーで派手に飲んでる連中だって、家では細君が、家計簿を見ながら、眼を釣り上げてゐる」

「いやに、佻しい話ね」

そういつて澄子は肩をすくめた。心なしか、吐く煙草の煙も何となく勢いがなくなっていた。澄子も、一流商社に勤めているかつての恋人と再会し、家計簿の話を聞かされるとは、思ってもいなかったのだろう。

「そうだな、佻し過ぎるね、それはそうと、一体何処で店をやっているんだい？」

「キタの新天地、ね、これから来ない、一寸見て頂戴」

「僕は飲めないんだ、駄目だよ」

「大丈夫、御馳走するから、私にまかせて頂戴、幾ら私に金が金に走った女性だからといって、昔の恋人から儲けようと、思わないわ」

と澄子は、久保木の心中を見透していた。実際、久保木は飲み代を思うと、怖ろしくて行けなかったのである。

久保木は腕時計を見た。

もう、テレビ映画には間に合わない。丁度半分終わった頃になる。最初から観なければ、面白くない映画だった。

課長のお供で、バーに行ったのは半年前だった。久保木にとっては別世界だが、若いホステスの香料の匂いを

嗅ぎながら、早く管理職になり、交際費を遣って飲みに行く身分になりたいと、思ったものだ。

飲んでいる時の課長は、会社では見られない間伸びした顔をしていた。

「じゃ、一寸だけ……」

と久保木はいった。

二人は喫茶店を出て、御堂筋の方に歩いた。微風にも、何処か春の気配が感じられる。

久保木は黒っぽいコートを着ていた。

「本当に一流会社の社員らしいわ」

澄子は、久保木をからかっているのか、何処か、浮き浮きしていた。

それとも、久保木と再会して楽しいのだろうか。タクシー乗り場には、かなり人々が並んでいた。すると澄子は、

「私の知っている婦人洋品店からハイヤーを呼ぶわ、この調子じゃ、十分以上、待たなくっちゃ」

そういうと澄子は心斎橋筋に戻って行った。久保木は仕方なく、澄子の後から歩いた。完全に澄子にリードされているが、別に久保木は抵抗を感じなかった。

学生時代も、久保木は澄子にリードされていたのであ

る。

ただ久保木は澄子の後を歩きながら、この女と結婚しなくて良かった、と思った。

もし澄子と結婚していたなら、とつくに喧嘩別れしていただろう。

さっき彼女が告白した通り、澄子は久保木の給料だけで生活出来るような女ではなかった。

澄子が入った婦人洋品店は、幸子が覗き込むような店ではなかった。

多分、特定の顧客だけを相手にしている高級店なのだろう。店内には、絨毯が敷かれ、フランス風の調度で、白い丸テーブルや、金飾りで縁どられた椅子が置かれていた。店は心斎橋筋から離れていて、一般客に入って貰いたくない、といった感じだった。久保木は、直ぐ店を出て、道で澄子を待った。

あんな店に、澄子と一緒にいて、デザイナー、店員達の視線に晒されるのは真平だった。

澄子は、久保木をそんなに待たさなかった。小柄な可愛い感じの女店員と一緒に出て来ると、久保木にいった。

「ハイヤー、直ぐ来るらしいわ」

女店員は、澄子を奥様、と呼んでいた。

さっき、喫茶店で、澄子は離婚して、独身だ、と久保木に告げた。それに、バーのマダムである。だからこの場合の奥様、というのは一種の敬称だろう、と久保木は納得した。

女店員は御堂筋の道頓堀橋の近くに二人を連れて来た。そして、メモ用紙に書いた車体ナンバーを見ながら、停車している大型ハイヤーの運転手にチケットを渡した。

運転手が車から降り、うやうやしくハイヤーのドアを開けた。

「さあ、どうぞ久保木さん」

と澄子がいった。

久保木は女性と二人だけで車に乗った経験が余りない。

幸子とたまに乗ることがあるが、自分が先に乗る。商店に勤めているが、海外駐在員の経験もないし、久保木は、平均的な日本の男性である。

だが、澄子にどうぞ、といわれた時、久保木は、一歩身を引いて、

「あなたからどうぞ」

といていた。

澄子は久保木の言葉にさからわず、

「じゃ、お先に」

とハイヤーに乗った。

女店員は車が動き出すまで見送っていた。

二

ハイヤーは湊町から阪神高速道路に入り、土佐堀で一般道路に出た。

そして新大ビルの傍で停った。澄子は運転手に礼をいってチップを渡し車から降りた。

澄子が経営しているクラブスミは、バービルの二階にあった。

澄子は小さな店だ、といったが、それは久保木に遠慮した言葉だった。

店の広さは二十坪以上あり、ホステスも十人以上いた。九時を一寸過ぎたばかりなので、客はこれから入ってくるのだろうが、すでに半分近く入っている。

澄子は愛想良く、久保木を入った右側の壁を背にした席に案内したが、間もなく久保木は、場違いなところに来たのを悟った。